

第1章

ふと顔を上げると、春の匂いがした。

読んでいた本を机に置き、開いている窓を眺める。遠くに、一筋の雲が見えた。

「あと三周！」という声が、窓の下から聞こえた。どの部活かまでは、わからない。

春はどこにあるのか、確かめようと椅子から立ち上がる。その時、後ろで扉の開く音がした。

「あ、先輩、早いですね」

小柄な女子が部室に入ってきた。歩くと、肩までかかる髪が、少しだけ揺れる。

「先輩？」

「えっと、誰だっけ」

「・・・大宮ですけど」

あきれたような声が、返ってきた。

「そろそろ名前ぐらい、覚えてくださいよ」

机を挟んで、斜め前の椅子に座ると、彼女が言った。

「名前ね」

「ええ、名前」

「でも、僕のこと、名前で呼ばないよね」

「先輩は先輩ですから」

「先輩ですか」

「そうです」

「そうですか」

「オウムですか」

「です」

「・・・先輩」

にらまれたので、口を閉じることにした。

「先輩、今は何を読んでいるんです？」

声が聞こえたのは、しばらくしてからだった。彼女も、本を読んでいる。

「え、僕？」

「この部室には、私と先輩しかいないと思うんですけど」

「えっと、これは」

本の表紙を見せようとして、途中で手を止めた。

「このやりとり、前にもしたような」

「あ、それは覚えてるんですね」

「さあ」

「恒例ですね」

「え、幽霊？」

「わざとですね」

「え、いや、僕は」

にらまれたので、残りの言葉を飲み込んだ。

「忘れものは、ないね」

「はい、大丈夫です」

返事を聞いてから、部室の鍵をかける。

薄暗い校舎を、並んで歩いた。

「失礼します」

彼女を廊下に残し、職員室に入る。棚がある奥まで進み、鍵を返した。

棚に一番近い席を見た。座っている背中に、声をかける。

「先生、今日の部活、終わります」

メガネをかけた顔が、振り向いた。

「ああ、そうか。わかった」

低い声で、先生が言った。

「では、帰ります」

「あ、古西」

「はい」

「大宮は？」

「廊下で待ってます。呼びますか」

返事までに、間があった。

「いや、いい。一緒に帰るのか」

「はい、二人とも電車なので。途中の駅までは、一緒です」

「そうか」

「あの、それが何か？」

「いや、お疲れさん」

それだけ言うと、先生は背中を向けた。

校庭を出て、駅に向かう。周囲には、部活帰りの制服姿が多い。

「成上先生、どうでしたか？」

今日は、少し肌寒いようだ。丸い月が、出ていた。

「先輩」

「あ、うん」

「先生、何か言ってました？」

「いや、別に何も」

「そうですか」

「そういえば、先生と話したこと、あったかな」

「ありますよ。入部届を提出する時に。それに、私のクラスの古典は、成上先生です」

「へえ」

「先生、部室に一度も来ないですね」

「うん。僕が一年の時から、一度も」

「読書部の活動に、興味がないんですかね」

「ま、僕たち、何もしてないけど」

「先輩は、先生に興味がないんですかね」

「ないこともないよ」

「今日は、部活は？」

母が尋ねてきたのは、朝、玄関の扉に手をかけた時だった。

「いや、ないよ。だから、早く帰ってくる」

「そうなの」

「え、何かある？」

「後輩ができたって、前に言ってたけど」

「うん、一人だけ」

「ちゃんとしてるの」

「ちゃんと？」

「そう。あんた、弟とか妹、いないから」

「それは、関係ないんじゃない？」

「まあ、仲良くするのよ。辞めるって言われないように」

「いや、部活を続けるかどうかは、相手の問題だから。なるようにしか
ならない」

「年寄りみたいなこと、言わないの。ちゃんとね」

「じゃ、いってきます」

「・・・という会話が行われましたとき」

部室に来た彼女に報告をする。

返事がない。しばらく、お互いの顔を見つめあった。

「先輩、私より後に来ること、ないですね」

「ま、先輩だからね」

「どういう意味です？」

「いや」

「ところで、今は、何を読んでいるんです？」

「うん、今は」

本の表紙を見せようとして、途中で手を止めた。

「その前に、僕の話に対して、何かコメントは？」

「先輩は、私が辞めると思ってるんですか」

「僕は君じゃないから、わからない」

「じゃあ、辞めてほしいんですか」

「お気に召すまま」

「・・・先輩」

にらまれた。

「いや、辞められると、部員はまた僕だけになるからね。それは、困ったことです、はい」

「弁解ですか」

「弁明です」

「何が違うんです？」

チャイムが鳴って、先生が出ていくと、教室が騒がしくなった。

広げたままの世界史の資料集を眺める。

「ここにさん、休み時間まで勉強ですかい」

前の椅子に座りながら、短髪の男子が話しかけてきた。

「ああ、久保寺君」

「熱心ですな」

「人類の歴史を振り返ると、愉快にならない？」

「現在じゃなく、過去に興味がある、と」

「どういう意味？」

「同級生と交流を深めたりはしない、と」

そう言って、久保寺君は笑う。

「まあ、誰も話しかけてこないからね」

「ここにさん、待ってちゃ駄目だよ。こっちから、行かないと」

「待ち合わせをした覚えはないけど」

教室を眺めた。あちこちに、群れがある。

「ここは、サバンナなんだね」

「え？」

「僕は、もう少し寒い場所にいることにしよう」

「ここにさん、相変わらずですな」

久保寺君が立ち上がる。

「久保寺君が、僕に話しかけるのは、どうして？」

「出てるんだな、ここにさんからは」

「え、くさい？」

「いや、オーラが」

「オーラ？」

「そう、オーラ」

「僕からオーラが出ている、そんな説が提唱されているんだけど」

彼女はちょうど、斜め前の椅子に座るところだった。

「どうかな」

「それ、先輩の自称ですか」

「いや、同じクラスの人が」

「先輩は、自分でどう思ってるんです？」

「いや、何も」

「自分のこと、わからないんですか」

「自分なんてものは、自分から一番遠いところにあるからね」

返事がなかった。彼女は、眉間にしわを寄せている。

「もう一度言うけど、どうかな」

「オーラが出てるかはおともかく、変わってますよね」

「え、僕が？」

「はい、先輩が」

「みんな、それぞれ、変わっているよ」

「そういうことを言うところが、変わってます」

「他人に、変わっていると連呼する人も、かなり変わっているよね」

「・・・先輩」

にらまれたので、話を切り上げた。

昼食の後、トイレに向かった。

洗面台の周囲に、数人の男子がいる。鏡を見ながら、髪の毛をしきりにいじっている。

それを横目に、洗面台の一つで口をゆすぐ。最後に、うがいも忘れない。

顔を上げると、鏡に映る男子たちと目が合った。

ハンカチで手をふきながら、洗面台を離れた。

「若者は、髪を気にするよね」

手元の本から、彼女が視線を上げた。

「若者？」

「髪型に自分の神経を尖らせています、みたいな」

「まあ、多少はあると思いますけど。誰だって」

「ふーん」

「先輩も若者ですよね」

「僕は、髪が短いから」

「長さは関係ないと思います」

「一応、気にするの？」

「私ですか。まあ、身だしなみの一つですよね」

「女の子だね」

「性別は関係ないと思います」

そう言って、じっと見つめてくる。

「え、何かな」

「先輩が、私のことを質問するのは、初めてですね」

「そうだっけ」

「どうしたんです、急に」

「僕は僕だけどね」

「よくわかりませんが」

にらまれた。

「おい、古西」

休み時間になり、教室から出たところだった。

振り向くと、先生が歩いてくる。

「あ、成上先生」

「放課後、部室に行くか」

「はい、行きます」

「部屋の隅に、段ボール箱がいくつか、積んであるよな」

「そう、でしたっけ？」

「あれ、中身を確認しておいてくれるか」

「わかりました」

「急ぎじゃないからな。終わったら、報告してくれるか」

「了解です」

「よろしく」

休み時間になっても、生物の資料集を見ていた。

「ここにさん、お客さんですぜ」

少し遠くから声がした。

見回すと、入口に近い席に、数人の男子が集まっていた。その中に、久保寺君の姿があった。

入口を指さしている。

見ると、小柄な女子が立っていた。

彼女だ。こちらを見ている。

資料集を閉じて、立ち上がった。

廊下の端に移動した。

「あの、すみません、先輩」

「いや、大丈夫」

会話が途切れた。休み時間の喧騒に包まれる。

「えっと、どうしたの」

「あ、古典の授業のあと、成上先生に呼ばれたんです。それで、部室にある箱の整理をしてくれって」

「ああ、それなら、僕もついさっき、先生から頼まれたよ」

「え、そうなんですか」

「僕、嘘ついたこと、ないよ」

「それは嘘ですよね」

にらまれなかった。

「あれ」

「え、何ですか」

「身構えたのに」

「だから、何の話です？」

「いや、いいです」

また、会話が途切れる。

「私の話は、それだけです」

「わざわざ、どうもね」

「失礼します」

彼女は、少し頭を下げた。

教室に戻る。入口の近くの集団が、いなくなっていた。

自分の席に座って、現代文の教科書とノートを用意する。

「ここにさん、ここにさんや」

そう言いながら、久保寺君が近付いてくる。

「ああ、さっきは、ありがとう」

「いえいえ。で、あれ、誰」

「誰って」

「あの小さい女子ですよ」

「怒られると思うよ」

「古西先輩はいますかって言ってたけど、ここにさん、もしかして」

「後輩だよ」

「え？」

「部活の」

「読書部って、たしか、部員はここにさんだけの」

「新入部員、第一号だね」

「もっと早く教えてよ」

「え、どうして」

「名前、何て言うの」

「えっと」

「ここにさん、知らないとかは、なしよ」

「たしか、大宮さん」

「大宮さん」

「気になるの？」

久保寺君が、何も言わずに、息を吐いた。

「え、何？」

「だって、もの凄くかわいいじゃん」

「ほう」

「お人形さんみたい」

「それはまた」

「ここにさんは、どうとも思わないの」

「人間に見えるけどね」

職員室に行くと、棚に鍵がなかった。

一番近い席を見る。先生の姿もなかった。

職員室を出て、部室に向かう。

扉を開けると、部屋の隅に、大宮さんが立っていた。背中を向けている。

「今日は、僕よりも早かったね」

背中が振り向く。

「あ、先輩、お疲れさまです」

「いや、疲れてないよ」

「でしょうね」

大宮さんをにらんでみた。にらみ返された。

「えっと、それが、例の箱だね」

部屋の隅を見た。段ボール箱が四個、積まれている。

「中身を確認するんでしたよね」

「とりあえず、一番上から開けてみよう」

箱を一つ下ろして、机に置いた。

「あれ、軽いな」

ガムテープをはがして、中をのぞく。

「ノートだね」

「あ、先輩、こういうものもありますよ」

大宮さんが薄い冊子を取り出す。緑色の表紙に、黒字で「読書報告」と書かれている。

「こっちのノートにも、同じことが書いてあるね」

ノートを取り出して、大宮さんに渡した。「読書報告」の文字は、赤字で書かれている。

ノートの下の冊子を取り出して、めくる。

「えっと、日付に本の種類、短い感想が書いてある」

「読んだ部員の名前もありますね。このノートも、同じやり方みたいで
す」

「われらが読書部の遺産だね」

大宮さんが、ノートから顔を上げた。

「そういえば、なんですか」

「はい、何なりと」

「この部、いつからあるんでしょう。古いんですか？」

「うーん、聞いたことないな」

「ですよね」

「え」

「私が入部するまでは、先輩しかいなかったんですから」

「ああ、まあ」

「これ、どうします？」

「残りの箱の確認をしたら、先生に聞いてみよう」

「他の段ボール箱も、今から確認しますか？」

「いや、今日は、もういいと思う」

「いいんですか？」

「歴史は、どこにも逃げないからね」

「よくわからない言い訳ですね」

第2章

「先輩って、友達、いないんですか？」

帰り支度をしている時だった。

「いきなりだね」

「私、教室に行きましたよね」

「うん、あれね」

「あの時、何となく、思ったんです。先輩、一人なんだなって」

「同じクラスの人と会話を交わすことぐらい、あるよ」

「でも、友達はいない」

「あ、そういえば、その友達が言っていたんだけど」

「え？」

「僕の後輩、かわいってさ」

「え」

「僕じゃなくて、友達のコメントね」

「それは、聞こえてました」

「ご感想は？」

「いえ、別に」

「いえ、別に？」

にらまれた。

「本当に、先輩の友達なんですか？」

「人のことばかり言うけど、後輩の方はどうなの？」

「私ですか」

「僕に後輩は、一人しかいない」

「私には、いますよ。それなりに」

「ほう」

「先輩とは違います」

「そりゃ、人」

にらまれたので、途中までしか言えなかった。

「ここにさん、ここにさんや」

久保寺君が、机の横に立つ。

体育の後、着替えを済ませて、一息ついたところだった。

「話題になってますよ」

「え、何の話？」

久保寺君が顔を近付けてくる。

「例の、ここにさんの後輩」

「そうなの？」

「そりゃ、もう」

「僕は、聞いたことないけど」

「男子トイレにおける、最新トピックですな」

「ああ、溜まり場の」

「あれは誰なんだ、ここにさんとどういう関係なんだって」

「へえ」

「俺がその場にいる時は、説明してるんだけど」

「直接、僕に聞けばいいんじゃない？」

久保寺君が、ため息をついた。

「ここにさんは、俺としか話さないから」

「他の人を拒んでいるつもりは、ないけど」

「ま、とりあえず、ご報告申し上げた次第」

「わざわざ、どうも」

午前の最後の授業は、音楽だった。筆記用具やノートを持って、教室を移動する。

階段を上がった。一年生のクラスが並んでいる。

ちょうど、階段の近くの教室に、女子が入っていくのが見えた。

小柄。肩までかかる髪。横顔。

大宮さんだ。

さらに階段を上ろうとして、足を止めた。

階段を戻り、教室まで行き、入口から中をのぞく。

奥の方で、大宮さんが数名の女子と話をしている。

男子が一人、教室から出てきた。

「あ、あの」

「は？」

男子が、こちらの胸のあたりを見た。学校指定のバッジを確認している。

「あ、はい、何でしょうか」

「ちょっと、人を探しているんだけど」

「誰を、ですか」

「大宮さんを」

「ああ。いますよ」

しきりにうなずいて、教室に戻る。大宮さんに話しかけるのが、見えた。

大宮さんが、こちらを見る。男子に笑顔で何かを告げて、教室の外まで来た。

「先輩、何ですか」

眉間にしわを寄せている。

「え」

「急に、どうしたんです？」

「いや、音楽室に行く途中で、見かけたから」

「そうですか」

「あの、怒ってる？」

「いえ、別に」

「あ、そう。用事は、特にないんだけど」

「そうですか」

「です」

「では、失礼します」

「あ、うん」

教室に戻る大宮さんを見送って、音楽室に向かった。

鍵を開けて、部室に入る。

窓を開けて、放課後の空気を室内に入れた。

椅子に座った時、扉の開く音がした。

「先輩、何なんですか」

入口に立ったまま、大宮さんが言った。

「ま、とりあえず、座ったら」

「結構です。話をそらさないでください」

「いや、そんなつもりでは」

「じゃあ、どういうつもりなんです？」

「いや、まあ、教室の近くを通りかかったから、ちょっと、どんなものかな、と」

「何がですか？」

「後輩に、本当に友達がいるかどうかって」

「この前の話ですか」

「そう」

「嘘だと思ったんですか？」

「いや、そういうわけでは」

「私、嘘ついたこと、ないので」

「それは嘘だよね」

大宮さんは、ため息をついた。

「あれから、大変だったんですけど」

「え？」

「先輩が帰った後、色々質問されました。さっきの人、誰なのって」

「ああ。日頃見かけない人がいれば、目立つよね」

「上級生が教室に来ることなんて、滅多にないです」

「ま、ただの部活の先輩だけど」

大宮さんがじっとこちらを見る。

「あれ？」

「知りたいですか？」

「部活の先輩」

「どう説明したか、知りたいですよね？」

「いや、言いたくないなら、別に」

にらまれたので、目をそらした。

「えっと、一応、知っておこう、かな」

「秘密です」

「は？」

「だから、秘密です」

そう言って、大宮さんはにっこりと笑った。

「先輩、目じゃなくて、手を動かしてください」

顔を上げると、机の上の段ボール箱が見えた。

大宮さんは、その中から冊子を取り出している。

「何を読んでいるんです？」

読んでいたノートを持ち上げて、見せる。

「十年近く前の、読書報告」

「やる気、ありますか？」

「こうして、感想を一つずつ見ていくと、面白いよ」

「面白い？」

「うん。色々な本があって、色々な感想があって。同じ本に対する感想でも、その内容は全然違う」

「まあ、そうですね」

「色々な人間がいる。そう思うと、愉快だよね」

「愉快なところに、水を差すようなんですけど」

「うん？」

「先輩を愉快にしてくれる、この段ボール箱たち、今まで放置してたん

ですか」

「ああ。僕が入部した時から、そこにあったけど、気にしてなかった」

「冷たいんですね」

「そんな冷たい先輩からの提案なんだけど」

「根に持ってます？」

「僕たちも、読書記録みたいなもの、やってみようか」

「私たちも、先輩たちに続けってことですか？」

「そこまでのものは、ないけど」

「いいですけど、先輩」

「ん？」

「その前に、段ボール箱の確認、まだ二箱、残ってます」

「それは、信頼すべき後輩に任せる所存」

大宮さんに敬礼した。にらまれた。

「あんた、部活、やってるの？」

家に帰ると、居間で母に尋ねられた。

「え、うん」

「帰ってくるの、早いじゃない」

「今日は、部活がないから」

「そうなの？」

「えっと、何かあるの？」

「前に言ってた後輩、大丈夫なの？」

「部活には来ているけど」

「ほら、あんたが一年生の時、他の人がみんな、辞めちゃったじゃない？」

「・・・ああ」

「だから」

「うん」

「うんって」

「大丈夫だと思う」

「あら、自信あり？」

「いや、希望」

「先輩、これ」

最後の段ボール箱の中を確認している時だった。

大宮さんから、ノートを受け取る。端のあたりが、少し変色していた。

「古そうだね」

「その、最初のページを見てください」

「日焼けした匂いがする」

最初のページに目を通す。

「えっと、『読書部の設立にあたり、尽力してくださった顧問の成上先生に感謝します。部員一同を代表して、読書部部长』」

「その成上先生って、成上先生ですよね？」

「同姓の別人でなければ、おそらく」

「先生、ずっと顧問をしているってことですか」

「これ、日付は、十四年前だけど」

大宮さんが段ボール箱の中をのぞく。

「もう、それで最後ですけど」

「じゃ、確認作業は、これで終了ということ」

「帰りに、先生に報告しますか？」

「そうだね。一緒に報告にいこう」

大宮さんが少し笑った。

「え、何？」

「いえ、何でもありません」

「その時に、先生に聞いてみよう」

「何をです？」

「この部の、短くも長い歴史について」

部室に鍵をかけ、並んで廊下を歩く。

「失礼します」

二人で職員室に入り、奥まで進んだ。棚に鍵を返す。

棚に一番近い席を見る。先生の姿はなかった。

「先生、いないみたいですね」

「見ればわかるよ」

「先輩」

「ん？」

「おあずけですね」

「大丈夫。楽しみは後にとっておくタイプだから」

「初耳ですけど」

チャイムが鳴って、しばらくしてからだった。

「ここにさん、ちょっとお聞きしたいことが」

数学のノートから顔を上げる。久保寺君が、前の椅子に座る。

「さっきの数学の問題なのですが」

「ちょうど、僕も聞きたいことがあるんだ」

「ほう、それはそれは」

「久保寺君って、特定のグループに入っていないよね」

「そうですね」

「で、僕にも話しかけてくれる」

「まあね」

「珍しいよね」

「え」

「すごいよね」

「お？」

「僕には、できないことだ」

「ここにさん」

久保寺君が、首を振る。

「お気を確かに」

「本心だよ」

「いや、冗談じゃなくて。急に、どうしたわけ？」

「さあ」

「大丈夫？」

「男子トイレの最新トピックは、どうなってるの？」

「ん？」

「前に話してくれた、僕の後輩がどうのって」

「ああ。もう下火になってますな」

「噂なんて、七十五日も続かないよね」

「え？」

「いや、別に」

「先輩、何を読んでいるんです？」

読んでいた本を机に置いたまま、開いている窓を眺めていた。

机を挟んで、前の椅子に座る大宮さんを見る。

「いや、今は読んでいないよ」

「先輩が手に持っているものは、何なんですか」

「今さらなんだけど」

「何ですか？」

「どうして、この部に入ったの？」

「今さらですね」

「先に言っておいたよ」

「部活紹介の冊子、もらったんですけど」

「ああ、入学してから配布される」

「それぞれの部活の紹介とか、勧誘のためのメッセージとか、書いてあって」

「うん」

「この読書部だけ、ページが白紙でした」

「ああ。何か書いて、提出するように言われて。だから、何もないですって」

「先生、何か言わなかったんですか？」

「先生と相談して、決めたんだ。興味のある人は、そんなことをしなくても、入部してくるだろうって」

「へえ」

「ま、それで、一匹は釣れたわけで」

「魚ですか」

にらまれた。それでも、続けることにした。

「それで？」

「え？」

「入部した理由」

「先輩が何を読んでいるか、言ってくれたら、教えてあげます」

「じゃ、今日の部活が終わった後、職員室に鍵を返してくれるなら、教えよう」

部室の鍵を差し出す。受け取ろうとして、大宮さんの手が止まる。

「それ、フェアじゃないですよね」

「僕と大宮さんは、いつだって対等です」

「あ」

「え」

「先輩、私のこと、名前呼びましたね」

「うん」

「初めてですね」

「そう？」

「ですよ」

大宮さんが笑って、鍵を受け取る。

「さ、先輩」

「交渉成立だね」

本の表紙を見せる。

「これはね」

その時、窓から風が吹き込んできた。もうすぐ夏がやって来ることを告げて、大宮さんの髪を少し揺らした。